

選評

はじめにおことわりすると、私は、試験とか、免許とか、ナントカ賞とかと言ったものが嫌いなのです。

その理由はいろいろ山ほどありますが、ごたごた理屈を並べるのは、読者にとって退屈でしょうから、一つだけ書いてみます。

物の善悪、好き嫌いはい人それぞれだと思ふんです。早い話が芥川賞をもらった小説を読んでも、私にはつまらない、面白くないと思うことがあります。それを受賞作品だぞ、傑作なんだぞと押しつけられるのはたまりません。

足場組立の作業主任なんてのも試験があるわけですが、むずかしい理論はともかくとして、免許をくれる試験官より、もろう人の方が現場の実際については、はるかにくわしいということも、あるわけでしょう。バカらしいじゃありませんか。

そんなのは屁理屈だと言われるかもしれませんが、と

もかく私は、ナントカ賞や、ナントカ免許が嫌いなんです。それなのに、どうしたわけか今回は「渡世賞」の選考委員を引き受けさせられました。人の世のめぐりあわせは皮肉なものです。

おまけにこうして、選評まで書くことになったのだから、人生というものは不思議というか、面白いと申しますか。

勿論、一所懸命ことわったんです。けれども「渡世賞」は独断と偏見なんだ。「そう大げさに考えなくても気楽にやれば一などとすゝめられて、気がついたら引き受けてしまっていたんです。

また、「渡世賞」には巨額な賞金がついているわけではなし、コレをもらったからって、たちまち流行作家になれるというわけでもありませんから、気楽にやることしました。

そうです。応募する人も気楽に書く、選ぶ方も気楽に選ぶというのが「渡世賞」らしいのではないのでしょうか。そこで、以下は私の「独断と偏見」にみちた選評です。まず、入選の「戦いすんで……」

書き出しから三分の一ほど退屈でした。しかし登場人物が動き出すと、トントントン拍子で面白くなりました。結

末の部分も、オチのつけ方がよかったと思ひます。しかし、「追重」は余分でした。

題は、女流作家に同じ題の有名な小説があるので、損をしています。で、「戦いすんで、日が暮れて」という題をちよめ、内容も前半三分の一と追重を削って入選としました。

選にもれた「太陽への微笑み」は、話の面白さは小説的で面白いのに、文章がモタモタしているのが欠点でした。いらぬ所に力が入りすぎたり、かんじんな所が舌たらずだったりでした。

一所懸命に書いているのは判るのですが、もっと気楽に書いた方がよかったです。ではないでしょうか。もう一息というところでした。

もう一つ「麗人の里」。題からして文学青年的気取りが、見え見えですが、内容もヘンに文学臭くて残念でした。

「渡世賞」は、いわゆる文学賞ではありません。うまい小説や、着かざった文字とは関係ないんです。作者は気どった言葉、気の利いた言い廻しをしようとして背伸びしているように思えます。そういうことをやめたとき、かえっていい物が出るんじゃないでしょうか。

それにしても題のつけ方というのは、むずかしいです

ね。私もいつもそれで苦労しています。今回の応募作品にも題のつけ方で感心したものはありませんでした。

詩では、森先さんが、たくさん送ってくれた中から四つと、佐々木さんの作品とを選びました。佐々木さんの作品は、もっと長いものでしたが、後半のヘンに教訓的なところを削らせてもらいました。削った方が詩としての面白さが生きると思ったからです。

いざわさんも、詩、短歌、俳句と、いろいろたくさん送ってくれましたが、俳句四句だけ選びました。

以上で私の選評は終了ですが、最後にもう一つだけ言わせて下さい。応募作品の字のことです。

なるべく読みやすい字で書いて下さい。上手とか下手とかということではなくて、私は生れつき感嘆ですから、人様の字の上手下手のことはいえません。いいねいな読みやすい字を、なるべく書いて下さい。

連載すぎて読めなかつたりすると、原稿を読む人、タイプを打つ人が泣きます。仕事の合間に物を書くのは大変でしょうが、お願いします。